

## 環境と農林漁業の相克 ——環境史の視点から——

(北海道大学公共政策大学院教授) 石 弘之

農林漁業は、自然の生態系の中で行われている産業であるが、人間が生態系を歪める形で無理をして生産性を引き出してきており、地表を変えた最大の原因となっている。この生態系における地表の変化の歴史をみると、10,000年前に、農牧地というその後自然生態系の半分を半自然生態系に変えてしまった人間の営みが始まった。さらに5,000年前に人工生態系（古代都市）が誕生し、それ以来、現代まで地球の都市化が進み、今では都市人口が農村人口と拮抗するところまできている。

13,000年前の最終氷期終結後に訪れたヤンガードライアス期（寒の戻り）に、それまで食料としていた木の実がなくなり、野生動物も消えてしまうという状況に遭遇した人間は、食べるものに困り、止むに止まれず狩猟採取生活に別れを告げて定住化を始め、植物の栽培、家畜の放牧を始めた。

定住化が始まると、食料を安定的に手に入れることができるようになり、人口の増加、余剰食料の発生、初期権力構造の発生に繋がる。しかし、このような古代国家は、一旦は繁栄するものの、国家が大きくなればなるほど食料生産を増やしていかなければならず、無理をして農地を増やした結果、自然生態系に様々な圧力をかけることとなり、環境破壊が起きた。

四大文明を始めとしてギリシャ文明、ローマ文明は、過剰な灌漑による塩類集積、森林の喪失、過剰な放牧により土地を破壊してしまったため農業生産が激減し、ついには滅びてしまった。多くの文明が栄えた地中海沿岸などは、今では文明が栄えたことすら不思議とも思えるような荒涼とした荒地となっている。

現在でも、焼き畑農業、過放牧、森林の伐採等による環境破壊が世界各地で起こっている。このままいくと21世紀末にはどうなるだろうかという大きな危機的状況を抱えている。

地域によってさまざまな農業形態ができたが、これが私たちの自然観や環境観に大きな影響を及ぼしている。日本という文化は、植物を中心にできた文化で、衣食住を始めとしてすべて植物を頼りにしていた。そのため、植物資源としての里山や裏山を大事にし、主食はお米、副食のたんぱく質は魚を選び、米と魚という自然界への影響が少ない文明を創り上げた。日本の文化は、このような自然条件、そこで行われた農業、林業、漁業で作られてきたといえる。

片やヨーロッパ文明は、小麦と肉（放牧）という文明を創ったが、これらは両方とも土壌浸食や砂漠化の原因と言われるように、土壌に対して悪い組み合わせを選択した。このため、土壌を破壊してしまうと、森林を切り開いて新たな畑や牧場を作っていかなざるを得

ないという自然に対して非常に敵対的な文明を創った。

しかし、日本はこれだけ立派な文化を育てながら、現在、農林漁業は産業としては崩壊、あるいは崩壊寸前にあり、どうやって再建するのかという深刻な問題を抱えている。

今、日本は重大な岐路に立っているのではないか。日本の農業・林業・漁業文化を踏まえた上で、日本の一次生産をどう再構築していくのかというのは、今が最後の残された時間ではないだろうかという気がする。しかし、もう遅いのかもしれない。

(文責 熱田健一)

#### 第6回(2006年2月16日)

### 現代の『農』のヴィジョン ——財政学からのアプローチ——

(東京大学大学院経済学研究科教授) 神野 直彦

「私たちはあまりに簡単に幸福になりすぎた。・・・農業社会は解体され、・・・物質的には豊かになったが、・・・お互いに他人同士となった。・・・小さい世界はもう残っていない。・・・なぜなら、幸福への呪文は〈儲かる社会〉だったからだ。」(抄、スウェーデンの環境の教科書から)。

「協力する社会」を目指したスウェーデンは財政再建を果たし、今では「希望の島」と称され、経済繁栄を謳歌している。それに対して、日本では、「競争する社会」を目指した結果、国民の半数以上が「日本は安全・安心の社会ではなくなった」と思っているなど、今や、お互いに協力しあって生きていく社会が音をたてて崩れようとしている。

農業を考える上で重要なことは、農業は、本来、協力原理で共同体的に営まれるもので、市場原理には基本的に馴染まないということである。また、農産物を工業生産物と同じように生産し、全国的に流通させようとしていることは農業の破壊ともいえる。

文化とは、「Culture：耕す」から始まっていることから判るように、耕すことを取り結ぶ人間の生活様式のことである。日本では、農業が文化を否定したために成り立たなくなり、「食」も崩壊して食料自給率が低下してしまった。地域を支えている産業循環や生活様式とは無関係に「発展なき拡大」を行った結果、地場産業が崩れて、生活様式も何もかもが全部破壊されてしまうという悲惨な現象が起きている。

ヨーロッパでは、それぞれの地域にそれぞれの文化が残っており、その文化を支える地場産業が残っている。文化を崩していないことは、一極集中が起こらず、近代的な建物が建っていないということによって簡単に判る。

今、時代は工業社会から知識社会に移ろうとしており、これからは「生活機能」が「生